

# 『巷説百物語』 『続巷説百物語』

りん——と、鈴が鳴った。

おんぎょうしたてまつる  
「御行奉為——」

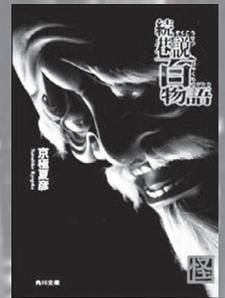
(巷説百物語「舞首」より)

「妖怪小説家」京極夏彦が描く、妖怪の一切登場しない時代小説。形式上は連作短編集の形を取っていて、一章ごとに一つの事件を御行一味が解決する。しかし『巷説百物語』と『続巷説百物語』における十三の物語は、一見すべて別々の事件であり各々独立した結末を見ながらも裏ではつながり合っており、最後は一つの物語へと収束する。個々の物語の完成度もさることながら、それらが絡み合っ一つにまとまってゆく様は非常に美しく、短編集の魅力と大長編の魅力をそれぞれ十分に持ち合わせていると言えるだろう。

このシリーズは時代や顔ぶれを変えながら、直木賞を受賞した『後巷説百物語』『前巷説百物語』『西巷説百物語』と展開してゆく。しかし『巷説百物語』はシリーズ第一作でありながらも短編集という形式のため、とりあえず一冊だけ読んでみても十分に楽しめるものとなっている。秋の夜長に何か読もうと思ったあなた、ぜひお試しあれ。

**時**は江戸時代の末期。戯作者志望で、怪談を探しながら諸国を旅する青年山岡百介は、雨宿りに寄った山小屋で不思議な者たちに出会う。御行の又市、事触れの治平、山猫廻しのおぎん。小悪党を名乗る彼らは、闇に葬られる事件の決着を金で請け負う、妖怪使いの御行一味であった。時には彼らの仕掛けを手伝い、時には彼らに踊らされながら、百介は数々の不思議で、怪しく、そして悲しい事件と出会うことになる。

この小説は「妖怪小説」なのだが、実は物語に妖怪が直接登場するわけではない。まともには解決できない事件を、妖怪の仕業にしか見えないような仕掛けを用いて収めること。これが「妖怪を操る」御行一味の仕掛けの手口であり、すべては彼らの仕業である。また、この小説では事件の中にいる人々の心に物語の焦点が当てられることが多い。人が背負う業も悲しみも、避らぬ理さえも妖怪に仮託され昇華されてゆく。御行一味は妖怪を操り、人の心を自在に動かすのだ。



『巷説百物語』『続巷説百物語』(講談社)  
著者：京極夏彦  
定価：『巷説百物語』 660円(税込)  
『続巷説百物語』 900円(税込)



## アスパラの豚肉巻き



材料(1人分)

アスパラ	2~3本
豚ロース肉	アスパラ1本あたり3枚
小麦粉	適量

タレ

酒	みりん	醤油	各大さじ1
砂糖			小さじ1

★アスパラの代わりに  
オクラを使ってもおいしいよ!

(作り方)

- ① アスパラに豚肉を斜めに巻きつけ、つなぎの小麦粉をまぶして半分に切る。
- ② 油を引いた中火のフライパンにフタをして、2~3分蒸し焼きにする。
- ③ フタを取り、回して全体に焼き色をつけ、タレを加え絡めながら1~2分焼く。
- ④ とろみがついたらフライパンから取り出し、好みの大きさに切る。



はみだし  
すてーじ

妹が女装本を買ってきました。  
⇒誰のためか……もうわかりですね。

(工・院 普通人)  
(個人的には女装女子というのも;編)